4　香港

過密都市の気軽なマイペース

沢田ゆかり

似て非なるファッション

一目で日本人と香港人を見分けるのは難しい。しばらく接していれば、言語や仕草が手がかりになるが、かりに街角ですれ違う瞬間にどちらかを当てなければならないとしよう。これは決して単なる架空のゲームではなく、香港の観光ガイドが日常的に直面する問題である。実際のところ彼らは、旅行社のワッペンをつけ忘れた日本人観光客を、しばしばホテルのロビーや空港の雑踏で一目で見抜かなくてはならない。

知り合いのツアーコンダクターによれば、このとき最大の鍵となるのが、衣類なのだそうだ。香港人は「普段着」と「よそゆき」の区別が比較的はっきりしているが、日本人はどこへ行くにも中間の「よそゆき」度を維持するので、分かりやすいという。この点、どちらかといえば香港人は、「フォーマルな格好をするときは徹底的に着飾るが、ラフなときはとことんラフ」になる

傾向がある。
日本でいえば銀座か丸の内に当たるセントラル地区に出かける時でも、散歩がてら遊びに行くのであれば、香港人の女の子は家の中と同じ古いトレーナーとジーンズ、化粧もせずに運動靴かサンダル履き、といった格好でやってくる。したがって日曜日には、おしゃれな女性よりもこちらの方が主流となる。これに対して日本人の女性は、外出する時はおおむね「よそゆき」、つまり家の中よりも一ランク上等な衣類を身につけるようだ。友人いわく「飲茶（広東式の軽食）に行くのに、ちょっとおしゃれな普段着で化粧するのが日本人。そうでないのが香港人」。

伝統とコピーからの脱却

次に、女性のフォーマル着を観察してみよう。平日に香港のオフィス街に出かければ、ＯＬたちが丸の内か青山かと見誤るほど、最新流行のスーツやドレスを美々しく着こなしている。ブランド天国ホンコン、ファッションアパレルの輸出基地、等の名に恥じないおしゃれぶりである。自由貿易港という特性と先進的な通信インフラが、世界中のファッション情報をいち早く香港にもたらし、彼女たちのセンスを刺激している。
もっとも香港のアパレル産業が高度ファッション化に転じたのは、それほど昔のことではない。三十年前まではヨーロッパの高級ブランド品は、おおむね香港を素通りし、第三国へと流れて行った。地元の女性は一九六〇年代には、まだまだ伝統的なチャイナドレス風のワンピースで通勤していた。

セントラル地区の休日。両端の子連れのご婦人たちに注目。サンダルばきで中国風の薄いブラウスの裾を外にヒラヒラさせている。

　また一九七〇年代には、彼女たちにとっての流行の発信基地は、ヨーロッパではなく日本であった。良質な日本製のアパレルが、香港人にも手ごろな値段で、かつファッション性の高い衣料として歓迎されたからである。日系百貨店のスタッフによれば、日本ですでに流行の一巡した既製服を香港に輸入し、そのまま販売した時代もあったという。

　いまではそのような単純な日本ファッション追随は、なりをひそめている。アメリカファッションの影響が、若者の間で顕著になってきたし、独自の地元デザイナーブランドも出現した。彼ら若手のデザイナーの中には、逆に東京に自社ブランドのブティックを設立したものもいる。

　これらの動きの背後には、香港政庁の後押しがある。自由港として名高い香港ではあるが、す

でに十九世紀的な自由放任主義にはとらわれていない。香港政庁は一九八〇年代になってからは、間接的に産業育成に力を注ぐようになった。ことに主要輸出品目であるアパレルに関しては、香港での高付加価値化を実現するために、「香港ファッション・ウィーク」を定めたり、若手デザイナーのファッション・コンテストを開催したりと、「香港独自のファッション」の育成を目指している。

これを「香港ファッション」と呼ぶには時期尚早かも知れないが、その萌芽は確かに感じられる。前述のＯＬたちのおしゃれが、どこか日本女性のそれとは異なっているのも、そんなファッション感覚の多様化が原因の一つであろう。

社会環境の影響

しかし、香港ファッションが日本のそれに似て非なるのには、上記した以外にもさまざまな要因がある。まず女性の社会的機能の違いが挙げられよう。「徹底して着飾る」精神は、派手な化粧と衣装につながる。香港の女性は、ひとたび会社に出勤するとなると、大学を卒業したばかりの、まだ頬の線に幼さを残した二十歳そこらの乙女でも、アメフトの選手のような肩パッドのスーツに身を包み、一昔前の八代亜紀のような厚化粧を施して、ヒールの音も高らかにオフィスを圧倒する。

その目的は、まさに人を威嚇することにある。同僚や上司に軽んじられないように、またアシスタントに威厳をもって命令できるように、彼女たちはことさら大人っぽく、きついファッションを好む。職場では女性は「可愛く」「優しい」存在としては、ほとんど期待されていない。そ

こは戦場なのだ。あのけばけばしいとも思える装いは、彼女たちの戦闘態勢に入る意思表示である。

逆に女子大生は、シャツにジーンズの地味な普段着で登校する。化粧はまずしないし、ハイヒールも履かない。キャンパス内では相手を脅す必要がないからだ。日本の女子大生の華やかさとは無縁である。

したがって前出の派手なOLたちも、いったんリラックスするとまるで別人のように変わる。暑い夏の夕方は、男女を問わずパジャマ[1]のままで街頭を闊歩して夕涼みをする。日本では、たとえば大手町を大勢の人がパジャマで歩くことはないと思われる。だが香港では、繁華街を一本裏に折れれば、まだまだ珍しくない風景[2]だ。

この過密都市では、居住区と商業地区がしばしば隣接し、あるいは混在している。つまり前述のセントラル地区や、いわば渋谷駅周辺に当たる尖砂咀のような繁華街でも、単なる「ご近所」

休日のセントラル地区。ジーンズにローヒールかスニーカー，それに化粧気のないスタイルが主流だ。

にすぎないという住民が大勢いる。彼らは家の延長としてこれらの繁華街を捉えているから、部屋着にゴム草履で外に飛び出す。さらに夜間人口と日中のそれとのギャップが、東京ほど激しくないから、夜に無人地帯となる場所は限られている。夜中まで寝間着で外をうろうろしても、さして危険でも不自然でもない(3)。

同時に、部屋の中が居辛いという面も、無視できない。香港は東京以上に、住宅事情が劣悪である。平均すると一家族当たりの居住空間は、わずか四〇～六〇平方メートルというお粗末さである。子供の多い家庭では、天井から床まで多層式のベッドを設置し、部屋を蚕棚のようにしている。その上、まだ冷房設備のない家庭もかなりあるので、夏の夜はなるほど外の方が快適といえよう。

普段着でくつろぐ空間

ところで考えてみれば、日本でも二昔前には下着姿の男性が平気で街頭を闊歩していた。東京オリンピックまでは、シャツとステテコ（これらは明らかに下着だと思うが）のおじさんが近所にいたはずである。女性も夏になると木製のつっかけを履き、アッパッパなどと呼ばれる貫頭衣を着て町へ買い物に出かけていた。普段着が一般庶民のおしゃれの対象になったのは、ごく最近である。下町では今でも部屋着で駅前商店街を闊歩する主婦の姿が見られよう。

そうしてみると香港とは、いわば下町の精神構造を留めたまま国際都市と化した社会なのではないか。大半の香港人の出身地は中国の広東省であるが、そこには香港の原風景が残っている。

省都の広州市は、部屋着で繁華街を歩く人々で溢れかえっており、なれなれしい私的生活の空気が大通りにまであふれている。歩道に椅子と食卓を広げて夕飯を楽しむ一家がいるかと思えば、道端で将棋を指す二人組、その隣ではタライで子供が行水している。人はこれを「田舎町」と呼ぶのだろう。だが下着姿でくつろげる空間を自宅に閉じこめた近代都市と、どちらが住み易いかは判らない。

昼間の香港は、派手で自己主張の強そうなファッションの若者が、騒々しく駆けまわるめまぐるしい国際都市である。しかし日が沈んでから、表をそぞろ歩く市民たちのパジャマや家庭着は、この移民社会の気楽で寛容な一面をかいま見させてくれる。

注(1)　山口文憲『香港　旅の雑学ノート』(新潮社、一九八五年、一二一～一二四ページ)には、パジャマ姿で町を散歩する女性のエピソードがある。

(2)　さすがに目抜き通りでは、こういった人々は目につかない。

(3)　総じて香港は、一般的なイメージとは裏腹に、夜間の治安が良い。つけ加えると香港の単位面積当たりの警官の数は、実はニューヨーク以上なのだそうだ。これはこの植民地が、極めて少数の異民族によって支配されるようになったという歴史に基づいている。イギリス政庁は、数の上で圧倒的な中国人人口を統制するために、当初から強大な警察力を保持してきた。

(さわだ　ゆかり／アジア経済研究所経済協力調査室)